

派遣先所属 福島県農林水産部水田畑作課 氏名 中村 祐一

派遣期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先の福島県水田畑作課稲作担当では通常業務としての稲作振興業務もあるものの、実際には福島県産米の安全性を確保し、消費者の信頼を回復する仕事の主たる業務となっています。

福島県産米というと、昨年、知事が安全宣言をしたすぐ後に、国の定めた暫定規制値を大きく上回る米が発見されるという事件がありました。このため、今年度の私たちの仕事は、行政に対する大きな不信がある中での、いわゆるマイナスからのスタートとなりました。

昨年の失敗を糧として福島県は、国の指導に基づくサンプル調査（モニタリング調査）だけでは不十分と考え、米の全量全袋検査を実施することとしました。福島県産米…推定1200万袋を全量検査しようという、気の遠くなるような取組です。

そこで、私たち4人の技術系職員からなるチームは、それぞれ「国のモニタリング調査の実施」「県の全量全袋検査の仕組みづくり」「全量全袋検査に必要な機器開発・導入」「検査に必要な経費等の賠償請求・配分」という業務を担当し、これを1人のリーダーがとりまとめるといった体制で進めています。この中で、私は機器開発・導入の分野を担当しています。

この半年の間に自分が担当した業務を列挙すると

- 1 ベルトコンベア式検査器の仕様決定
- 2 事業参入メーカーの審査・選定
- 3 各メーカーの検査器開発状況把握と導入主体への情報提供
- 4 5メーカーを集めた合同プロポーザルの開催
- 5 検査器を実際に行う検査員の育成（テキストの作成、研修会の開催及び講師）
- 6 検査済を証明するラベルの仕様決定とメーカー選定
- 7 全袋検査器を通さない検体（フレキシブルコンテナ出荷など）の検査事務
- 8 検査器の不具合発生時対応及び検査性能の維持確認業務

このほか、日中は各出先機関（福島県では「出先」と呼んでいます）や市町村、農協、生産者、消費者などからの苦情や問い合わせ対応に追われています。

業務環境ですが、プロパーの福島県職員の皆さんには、派遣職員では対応できない県の意志決定に関わる職務が集中し、深夜・休日を問わず働かれています。しかも、どんなに仕事をしても、集まってくるのは不満や苦情ばかり。それでも、忍耐強く誠実に仕事を進める姿には、本当に頭が下がる思いがします。

一方、我々派遣職員に適した仕事もあります。検査器の性能チェックや検査結果の信頼性に関する問い合わせ対応です。福島には縁もゆかりもない第三者の公平な目で判断して、検査は公正に行われており、出荷されている米は安全ですと答えることができるからです。



写真1 検査器の性能をチェック

ただひとつ問題なのは、4つの分野について、それぞれ専門性が高くなっている上、お互いの分野について学び合う時間が取れないため、相互理解や情報共有が十分でなくなっていることです。私自身、他の3分野の知識が十分ではなく、自分の分野についても、相談できる相手がいないという不安を抱えています。

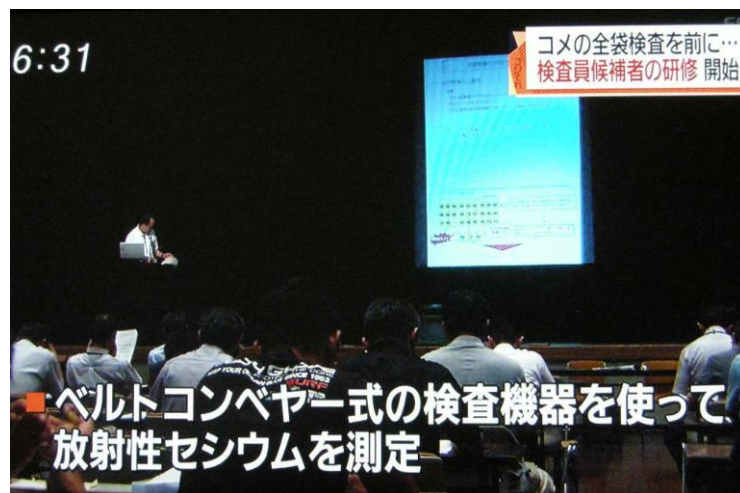


写真2 検査員研修の講師（各局 TV にて紹介されました）

こうした中で、米袋全袋検査は9月中旬、本格的に開始しました。検査器も当初は様々な不具合が判明し、対応に追われる日々でしたが、それも一段落。この報告書を作成している時点で、198 台の検査器を千数百人の検査員で運用し、600 万袋以上の米袋が検査を終えています。

この全量全袋検査、マスコミに批判的に取り上げられることも多かったです。先日、

500万袋（その時点の検査数量）の中から数袋の基準値超過米を見つけ出した実績について、「国のモニタリング調査では発見できない可能性が高い汚染米の流出を未然に防いだ」という論調で報道されました。この時には、チーム全体の士気が上がりました。

また、先日、上田知事も米の検査場にお越しになって、検査の様子を御覧になったとのこと。知事ブログでも紹介していただき、大変ありがたく思うとともに自分の仕事に誇りを感じました。ただ、検査器本体、現場の検査員、米袋に貼られていた検査済ラベルなど、その場で目にされた全てのものが、埼玉県職員のアレンジによるものであることをお伝えしておけなかったことが残念です。本来、都知事より前に出て、埼玉県の貢献について語っていただけた場面でしたので…。

2 復旧・復興状況や被災地での見聞・感想

仕事で訪れる場所は米を生産可能な現場ばかりですので、業務で被災地を見ることはありません。そこで、休日を利用して被災した沿岸地域を訪れてみました。すると、片付けが終わったという程度で、復興は全く手つかずの状態。水田であったと思われる場所は、塩害や作付制限の影響で、荒れ果てた土地が延々と続く見たこともない光景でした。耕作していた農家の気持ちを考えると、暗澹たる気持ちになった一方、浮かれた気持ちでは仕事ができないと、気が引き締まりました。



写真3 荒れ果てた水田が広がる（南相馬市・7月）

また、一緒に仕事をしている福島県職員の皆さんも、みなさんそれぞれ震災のつらい経験乗り越えて仕事をされています。ふとした時に、当時の話を聞かせてくださる皆さんを前に、自分の言葉選びは慎重にするよう心掛けていました。ところがそんな中、現場から遠く離れたところから心ない言葉が飛んできました。「放射能地域の人、結婚しない方がいい」…衝撃的でした。発言者が埼玉県政にも関係のある人物ということを知り、周囲でショックを受けている女性職員を

前にして、掛けられる言葉ありません。もちろん、妻と2才の娘を連れてきている自分にとっても、後方から弾を撃たれた気分です。激しい憤りを感じました。

ネット上でのコメントも同じですが、福島の復興にとって、最大の敵は「無知と無関心」です。正しい科学知識が無いのに「えせ科学者」のようにふるまい、根拠のない風評を流す人。そもそも関心もなく、福島外しのみを声高に叫ぶ人。復興に向けた数々の努力も、こうしたネガティブな発言のために、効果が半減しています。

福島は今、難病にかかった病人と同じです。決して死んだわけではありません。「生きたい」と思って頑張っています。治療法はお医者さんに任せるとしても、せめて肉親を助けたいと思う心と同じに、優しく見守ってほしい、というのが福島派遣職員としての切なる願いです。